

モーセ⑥ 最後の任務の全体像

□モーセの信仰の手本

今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、主があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。(申命記 4:1)

□前回までの振り返り

1. 荒野の旅も 40 年目に入り、宿営地は再びカデシュ。メリバの水事件が起きた。この事件の中でモーセとアロンは主の命に従わなかったために、二人とも約束の地に入れなくなった。カデシュを旅立ち、ホル山に着いたとき、アロンが死んだ。
2. 燃える蛇事件：ホル山から旅立ったあと、エドムの地を迂回するため、南の紅海に向かう道を進んだ。再び約束の地から離れて行く。その途中で民の不満が爆発した。不平を言った民に対して、神の罰が下った。「燃える蛇」と呼ばれる毒蛇の来襲であった。民がモーセのところに来て助けを求めた。主はモーセに、作り物の蛇を旗ざおの上に付けるように命じ、かまれた者がそれを仰ぎ見れば、死なずに「生きる」、と約束された。実際、かまれてから、それを仰ぎ見た者は生きた。
3. バラムの事件：イスラエルは旅を続け、ヨルダン川の東、「モアブの草原」に宿営した。このとき、モアブの王はミディアン人と組んで、呪術者バラムを招き、イスラエルを呪わせようとした。主はバラムに呪いではなく、祝福のことは語らせた。
4. ペオルの事件：呪いをかけることに失敗したので、今度はミディアン人が策略を立て、それをモアブの娘たちに実行させた。これにより多くのイスラエル人がモアブの偶像の神バアル・ペオルを拝んでしまい、主の罰により 2 万 4 千人が死んだ。その後の人口調査により、前回の調査時からの生き残りはヨシュアとカレブだけと判明。38 年前のカデシュ・バルネア事件で、主は、そのときの世代の人々の中から約束の地に入ることでできるのは、エフライム族ヨシュアとユダ族カレブの二人だけになると言われた。そのことばのとおりとなった。
5. メリバの水事件により、モーセも約束の地に入ることはできない。モーセの死期が近づいた。モーセには最後の任務がある。任務の内容を大きく分けると 3 つ。
 - (1) 確認する：シナイ契約（モーセの律法）の確認をし、民の前に、律法の「祝福とのろい」を置く。主と民との誓約に立ち会う。
 - (2) 預言する：約束の地に入ってからでもイスラエルは不従順を重ね、ついには、律法ののろいを受けて、世界離散するであろうと預言する。
 - (3) 別の契約を与える：しかし、主は、アブラハム契約の約束に基づき、必ずイスラエルを回復してくださる。そのことを明確にするために、シナイ契約（モーセの律法）とは別の契約（土地の契約）を民に与える。

6. モーセは任務にとりかかる前に、**荒野の旅を回想し、これから語ることの全体像を示す**。申命記 1 章から 4 章 40 節まで、**申命記のいわば序文**というべき部分である。全体像を語ったあと、4 章 41 節から 43 節で「逃れの町」を指定し、そして、いよいよ 4 章 44 節から、(1) 確認する・(2) 預言する・(3) 別の契約を与える、という最後の任務に進む。**本日は、序文のところ、申命記 1 章から 4 章 40 節まで**を扱う。

□モーセ⑥ 最後の任務の全体像

1. モーセの最後の任務、その時と場所とテーマ（申 1：3、5）

モーセの最後の任務の時

申 1：3 第 40 年の第十一月（2 月）の一日にモーセは、主がイスラエルの子らのために彼に命じられた、すべてのことにしたがって、彼らに語った。

- 第 40 年の第十一月の一日・・・エジプトを出た年を第一年として 40 年目。この年の第五の月の一日には、アロンが死んだ。それからちょうど半年。
- 彼らに語った・・・モーセがこのとき語ったことの記録が、申命記

モーセが語った場所とそのテーマ

申 1：5 ヨルダンの川向こう、モアブの地で、モーセは次のように、みおしえの確認を行うことにした。

- モアブの地・・・元々はモアブの領土だったので、「モアブの地」、あるいは「モアブの草原」（民 22：1）と呼ばれていた。イスラエルが来たときには、アモリ人の王シホンの支配下にあった。シホンがイスラエルの通行を許さず、出兵して攻撃してきたので、イスラエルは応戦し、その地を占領した。アモリ人に関する創世記 15 章 16 節の預言成就。
- みおしえの確認・・・テーマは、39 年前にホレブ（シナイ山）で与えられた神の教え（モーセの律法）についての確認。ホレブでの契約時に「守ります」と言った世代は、ヨシュアとカレブ以外は全員死んだ。第 2 世代となっているイスラエルの民に、モーセはあらためて律法の内容を語ろうとしている。

2. 回想（申 1 章 6 節～3 章）

ホレブの山からの出発（6～19 節）→カデシュ・バルネア事件（20～46 節）→カデシュ・バルネアを出発してからゼレデ川を渡るまでの 38 年間（申 2：1～23）→アルノン川を渡ってアモリ人の地に入ってからのこと。ヘシュボンという町の王シホンがイスラエルを攻撃したのでこれを撃破した。すると次は北のバシャン地域の王オグが攻撃してきた。イスラエルはこれも撃破して、それらの町や地域を占領した。「こうして私たちは、ベテ・ペオルの前にある谷にとどまった。」（申 2：24～3：29）

- ベテ・ペオル・・・ここで、バラムの事件とペオルの事件が起きた

3. これから語ることの全体像を示す（申 4 章 1～40 節）

(1) 律法を守れ。それは、何のためか

申 4：1～2 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、主があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。

- あなたがたが生きるため・・・律法は何のためか、二つある。第一は、イスラエルの人々が死なずに生きていくためである。
- あなたがたの父祖の神、主があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するため・・・第二は、イスラエルが約束の地に入ってから、そこで生活し続けるためである。
- 主の命令を守らなければならない・・・主の命令を守るとは波線部の 4 つ。律法を聞く。それを行う。それにつけ加えない。それを減らさない。

(2) 律法を聞いて行うなら生きる、そうでないなら死ぬ。その実例がペオルの事件

申 4：3～4 あなたがたは、主がバアル・ペオルのことでなさったことを自分の目で見た。バアル・ペオルに従った者すべてを、あなたの神、主はあなたのうちから根絶やしにされたのである。しかし、あなたがたの神、主にすがってきただけであなたはみな、今日生きている。

(3) 約束の地で律法を守り行え。そうしたら、イスラエルは偉大な民になる（5～8 節）

(4) 偉大な民になったからといって高ぶるな（9 節）

(5) 特に、偶像を造って拝むようなことはするな（10～19 節）

(6) もし偶像を拝んだら、どうなるか：約束の地から追われ、世界離散になる（20～28 節）

申 4：23～28 気をつけて、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れることのないように、またあなたの神、主の命令に背いて、いかなる形の彫像も造ることがないようにしなさい。あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたみの神である。

あなたが子や孫をもうけ、あなたがたがその地に長く住むうちに墮落して、何かの形に刻んだ像を造り、あなたの神、主の目に悪であることを行い、御怒り

を引き起こすようなことがあれば、私は今日、次のことで、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。

あなたがたは、ヨルダン川を渡って所有しようとしているその地から追われ、たちまち滅び失せる。そこで、あなたがたは長く生きるどころか、すっかり根絶やしにされる。また、主はあなたがたを諸国の民の中に散らされ、あなたがたは主が追いやる国々の中で、ごくわずかな者として生き残ることになる。あなたがたはそこで、見ることも聞くこともできず、食べることも嗅ぐこともできない、人の手のわざである木や石の神々に仕える。

(7) しかし、主のあわれみとアブラハム契約のゆえに回復される

申 4：29～31 しかしそこから、あなたがたがあなたの神、主を探し求め、心を尽くし、いのち（たましい）を尽くして求めるとき、あなたは主にお会いする。こうして終わりの日に、これらすべてのことがあなたに臨み、あなたが苦しみのうちにあるとき、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従う。あなたの神、主はあわれみ深い神であり、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、あなたの父祖たちに誓った契約を忘れないからである。

(8) まとめ：主だけが神であり、ほかに神はいないことを知れ。そして律法を守れ
(申 4：32～40)

39～40 節 今日あなたは、上は天、下は地において主だけが神であり、ほかに神はいないことを知り、心にとどめなさい。今日、私が命じる主の掟と命令を守りなさい。あなたも、あなたの後の子孫も幸せになり、あなたの神、主が永久に与えようとしておられるその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである。

□本日の課題

旧約聖書のモーセの律法は、だれに、何のために与えられたのでしょうか。 次の二つの説明のうち、正しいのはどちらでしょうか？

- ① モーセの律法は、本来、人類皆に与えられた。神のみこころを示し、守らせるためである。それを守り行うなら、永遠のいのちを受けることができるが、だれもできない。だから救い主が必要となった。
- ② モーセの律法は、イスラエルに与えられた。二つの目的がある。第一に彼らが死なずに生きるように、そして第二に、約束の地で生活し続けることができるように、である。律法を行うことで永遠のいのちを受けたり、救われたりするものではない。救いは、人の行いではなく、神の恵みによって与えられる。それを受けるために人の側に必要なのは信仰だけである。